
■ さろん | Mail News 2017/4/15 | #89 ■ 【読み物号】

ご案内不要の方はお手数ですがこのメールにそのままご返信ください。

哲学カフェ及び関連イベント情報をお送りします。みなさんの興味・関心の一助としていただくとともに、今後とも「さろん」を応援いただければ幸いです。

なお、このメールニュース掲載のコラム等は執筆者の個人的な考えを表したものです。会や専門領域における統一見解や事象を扱っているものではありません。予めご了承ください。

=====Vol.89 2017年4月15日(土)=====

さ | ろ | ん |

└┘└┘└┘

M | a | i | l | N | e | w | s |

└┘└┘└┘└┘└┘└┘└┘

<http://salon-public.com/>

(バックナンバーはHPからご覧いただけます)

<https://twitter.com/salontetsugaku>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

=====

INDEX

| 【おしらせ(A)】 (4/24) なごみ屋ゆる喫茶

| 【おしらせ(B)】 (6/17-18) さろん仙台ツアー

| 【1】 コラム/エッセイ

| ◇ 『言葉について思う』

| ◇ 『その名にちなんで』

| ◇ 『愛。おぼつかない愛と性』

| 【ご案内】 「さろんラボ」企画を募集しています

| 【2】 コトバをハーバリウムする

| 【3】 さろんアーカイブの遊歩道

| 編集後記

CONTENTS

【おしらせ(A)】

(4/24) なごみ屋ゆる喫茶

テーマ 「葉桜に蛍光ピンクのスプレーを…」

通称『ゆるカフェ』。地味に営業中です。
今月のテーマは「葉桜に蛍光ピンクのスプレーを…」。
4月24日(月) 19:30-21:30 オープンです。

今月も例によって例のごとく少人数で集まって、ゆったり考えたり感じたり聞いたりしてみます。
ゆるっと奏でる月イチのセッション、お気軽にいらしてください。

定員5名まで

4月24日(月) 19:30 より

渋谷エリア(申込者にご案内)

参加費100円(別途、注文した飲食費実費をお支払いください)

お申込み: salontetsugaku@gmail.com

(幹事: せりざわ)

【おしらせ(B)】

(6/17-18) さろん仙台ツアー

詳細が決まりました♪

かねてから予告をしていましたが、6月に実施する仙台ツアーの概略旅程を下記にてご案内すると共に、本日から募集を開始します。

ぜひこの機会に弊社スタッフと一緒に仙台市まで遠征し、現地での弊社例会や親睦会、哲学枕投げ、地元の哲学カフェなどで楽しみませんか?

・日程: 6/17(土)から6/18(日)まで

・概略旅程:

- 1) 6/17(土) 午前~15時まで: 各自で仙台市へ移動
- 2) 同日 午後(15時~予): さろん哲学 at 仙台市内のカフェ(後報)
- 3) 同日 夕刻 : 親睦会(場所・会費: 後報)
- 4) 同日 宿泊 : 晩翠亭いこい荘
<http://www.ikoisouryokan.co.jp/index.html>
 - 4人部屋あるいは3人部屋の予定
 - 注; 部屋は参加人数により変更の可能性有
 - 夕食なし/朝食付き
 - 料金: 一泊 8,300円/人予定
- 5) 同日 夜(希望者のみ): 哲学枕投げリターンズ at 旅館の部屋
- 6) 6/18(日) 午前~15時まで: 自由行動
- 7) 同日 15:00~17:30 : てつがくカフェ@せんだい at smt*1

<http://tetsugaku.masa-mune.jp/>

*1) smt ; せんだいメディアテーク

<http://www.smt.jp/>

8) 同日 18:00頃 : 現地解散
・定員: 7~8名程度まで

上記の旅程は全体のフルメニューですが、個別単独のイベントだけの参加も可能です。
参加の希望や、お問合せなどはお気軽に下記までご連絡をお願いします。
・仙台ツアー実行委員長宛て; salontetsugaku@gmail.com

仙台ツアー実行委員長 堀越

【1】コラム/エッセイ

- | | |
|----------------|---------|
| ▽【言葉について思う】 | 一生 |
| ▽【その名にちなんで】 | しまと ねりこ |
| ▽【愛。おぼつかない愛と性】 | セリンジャー |
-

▽【言葉について思う】 一生

今年3月10日に、日本政府は南スーダンの国連平和維持活動（PKO）からの撤収を突然表明した*1が、新聞報道によれば*2、「この南スーダンPKOに参加する陸上自衛隊の日報で現地の『戦闘』が報告されていた問題に絡み、稲田朋美防衛相は8日の衆院予算委員会で『戦闘行為』の有無について、『事実行為としての殺傷行為はあったが、憲法9条上の問題になる言葉は使うべきではないことから、武力衝突という言葉を使っている』と述べた。PKO参加5原則では、紛争当事者間の停戦合意が参加の条件で、『国際的な武力紛争の一環として行われる、人を殺し、または物を破壊する行為』という、政府が定義する『戦闘行為』があった場合、自衛隊はPKOに参加できない。稲田氏のこの発言は『参加ありき』で現状を判断しているとも受け取られかねない内容だ」。

作家川上未映子氏は、次のように語っている*3。「…先日、『配偶者に主人や嫁という言葉を使うのはやめよう』とコラムで書きました。パートナーとは対等な関係であるべきなのに、なぜ主従関係や属性を表す言葉がいまだにこんなに使われているのか、と。……『呼び方なんてたいした問題じゃない』と言う人もいる。でも言葉って本当に大事。男性でも女性でも、配偶者を『これ』とか『おまえ』とか呼ぶようになってきた時から、DVとかそういう関係が作られていくんですよ。主人とか嫁とか呼ばれていると、そういう関係性が内面化されていく。だから言葉の力を馬鹿にしてほしくないんです。もう2017年なのだから、これまで当たり前に使われてきた言葉の賞味期限を見直していかないと。『女子力』なんかも、女性を都合よく扱うための言葉としか思えない」。

稲田氏は「(同一の、ある事実行為に対し) 問題になる言葉は使うべきではないことから(より適した言葉を選んで)使っている」と主張している。一つの事実行為を巡って言葉を使い分けることで、事実行為そのものの意味を変質させてしまっていないか。そこに何かの意図が透けて見えるからか、懸念が消えない。一方、川上氏が指摘する「言葉の力を馬鹿にしてほしくない」「(誰かや何かを)『都合よく扱うための言葉』は賞味期限を見直していかないと」いけないという主張は腑に落ちる。聊か話は変わるが、最近は巷に溢れる様々な表現が気になって仕方がない。"Road map"は

その意味からは「工程表」でなく「行程表」のはずであるし、"Challenged people"は「障害者」でなく「障碍者」と表記したい。何かを隠蔽する意図からではなく、言葉の力を馬鹿にせず、その可能性を切り拓く（ひらく）ために、もう少し心を遣い（つかい）続けていたい。

*1：朝日新聞 2017年3月10日：

首相「死者出たら一巻の終わり」探り続けたPKO撤収

*2：朝日新聞デジタル 2017年2月8日：

「9条上問題になるから『武力衝突』使う」稲田防衛相

*3：ハフィントン・ポスト 2017年3月6日：

川上未映子さん「主人や嫁という言葉を使うのはやめよう」

▽【その名にちなんで】 しまと ねりこ

「ねえ！これって、ちょっとエロくない？」そう言って、彼女は陽気に笑った。休日にうちを訪ねて来た友人が、私の本棚で何か発見したらしい。その時の言葉だった。

でも、どうか誤解しないでほしい。私はやましい本なんて一冊も持っていない。彼女が見ていたのは「日本の樹木」という植物図鑑。開いた頁の、指で示した先には或る木の名前があった。フトモモ科の常緑高木、フトモモ。友人はその名前から人間の太ももを連想して、エロいと騒ぎたてて喜んでた。

大のおとなが、太ももに大はしゃぎなんて。私は呆れて、言葉を失った。でも友人は、可笑しくてしょうがない様子で続ける。「フトモモなんて、初めて知ったよ！なんでこんな変な名前なの？もしかしてこの木、太ももに似てるのかな？」私もつい笑ってしまう。「太ももみたいな木なんてあるはずないでしょ。やめてよ、小学生男子みたいな発想は。」

そう言ったが実は、姿かたちが似た物にちなんで名づけられた植物は少なくない。ミズヒキ、ギボウシ、気の毒なオオオイヌフグリ。だから「太ももに似ているからフトモモ」という推測も、あながち的外れとも言えない。そう思い直した私は、友人に約束した。いつか、名前の由来を調べてみるよ、と。でも、フトモモの話はそれきりになってしまった。当時の彼女は外国への転居を間近に控えていて、その準備で大忙しだったから。私も友を見送る寂しさに、妙な名前の木のことなんてすぐに忘れてしまった。

それにしても、草木の名前はなかなか面白い。似た物にちなんだ名前ばかりではない。その生態の特徴を表した名前をもつ植物もたくさんある。樹皮がつるつるして猿も滑り落ちそうだから、サルスベリ。日が落ちてから花を開くのは、待宵草。

むかし、待宵草の群生を見たことがある。千葉の海辺の、寂れた別荘地だった。海岸に向かう道すがら、薄闇のなかで咲く小さな花の名を尋ねると「都会の人ときたら、マツヨイグサも知らないだね」と、土地の人が大げさに嘆いてみせた。宵を過ぎた頃、同じように東京から来ていた人と話をした。柔らかな、でもよく通る声をした人だった。前職はラジオのアナウンサーだったらしい。渡された名刺には姓と名の間に何文字かのカタカナがあって、自然と目をひいた。この名前は

外国の血筋ですか、と不躰な質問をした私に、自分の洗礼名だと教えてくれた。「洗礼名……ですか？」
「ええ。私はカトリックだから。ある天使にちなんで名づけられたの。」「天使って、名前をもって
るんですか？知らなかった。」「名前もあるし、それぞれ役割もあるのよ。私が名前を戴いた天使は、
いろいろなことを皆に知らせる、伝達係みたいな仕事。」「私は先ほど聞いたばかりの彼女の経歴を思
い出し、それならあなたにぴったりの名前だと思う、と告げた。するとその人は微笑んで、答えた。
「時々、この名前に導かれているように思うの。私のやるべき事を名前が示しているような気がし
て。でも私だけじゃなくて、多かれ少なかれ、みんな自分の名前に沿って生きているんじゃないか
しら？」

それは突飛な考えのようで、どこか肯けるところもあった。植物は、その姿や性質が既にあって、
それにちなんで名づけられる。だから、名は体を表すものとなる。人が名づけられるのは生まれた
直後だから、まだその人の特徴は未知数だ。名前は最初、持ち主の個性を反映してはいない。でも
人は、与えられた名前を自分と強く結びつける。その名が呼ばれるのを聞いたりその文字を目にし
た時、「(それは)私のことだ」と思う。自らを名乗るため、その名前を口にする。自分の手でそれ
を書き記す。生きている間じゅう、何回も何回も。それらの経験を通して、その音の響きや文字の
かたち、漢字の意味が、「自分とはこのような人間だ」というイメージをかたち作る一端を担うのか
もしれない。その、自己についての心象が、その人の行動や選択に多少でも影響を与えたとしたら、
人間は自分の名前に導かれて生きるとも言える。人が何かを行い何かを選びとる(そして何かを選
ばない)、その積み重ねがその人の生き方、個性となるのだから。

その後外国に移り住んだ例の友人からは、時々メールが届く。今も変わらず、周りの出来事に素朴
で温かい関心をよせている様子が伝わってきて、読むたびにうれしくなる。彼女が気負いなく自然
にその名前を体現していることが、私にはわかるから。次に会ったら彼女に伝えたい事が、ひとつ
ある。

「あなたの名前と私の名前の漢字を並べてギリシャ語にするとね、“フィロソフィー”っていうご大
層な言葉ができるんだよ。これって、ちょっとすごくない？」

さて、彼女は興味を示すだろうか。日本では「哲」も「学」も、たいてい男の人の名前なのにね、
と言いついてみようか。あんがい面白がってくれる気がする。

「そんな事より、フトモモの由来は調べてくれたの？」と、怒られるだけかもしれないけれど。

▽【愛。おぼつかない愛と性】 セリンジャー

——星のように彼女がある日ささやいた「あなたはかなりばかな人だわ」(俵万智)

昨年9月の記念例会のテーマは『愛するということはどういうことか?』(*1)だった。30名を超す
参加者が集ったあの場に、断片化された真理ではなく「愛とはつまりこういうことなのです」とい
う全体性を備えた真理を持っていたひとは(おそらく)いなかったのではないかと。むしろ、自身の
経験と知識によって織り成された恋愛観がどれだけ信頼できるものなのかをいろんなひとの恋愛観
と見比べることで、欠けている視点に気づかされたり、逆に自信を深めたりしたくて参加してくれ
たのではないかとおもう。それくらい言語で追いつめることはむずかしい。愛(する/される)と

はおぼつかないものだ。それでも愛について考えようと参加するのは、実生活で活かしたいという動機でもあるだろうし、また純粋な形而上学として検証したいという動機でもあるだろう。おぼつかなさと同対照に、愛という主題はどこまでも間口がひろく、大黒柱は太くて、奥行きは相当のもので、部屋数も文句のつけようがない。体験的に語ることもできるし、専門用語を使いながら階段を掛けたり建て増すこともできる。愛。体験的な恋バナから古今の書物に語られた恋愛哲学までのさまざまな愛の変奏。

桜の森の満開の下で何度目かの「スティル・ライフ」再読をしていて、愛についてのおもしろい一節を見つけた。『男と女が勝手にくっつく、その最後の形式的な段階しか戸籍係にはわからないんだ。途中で口をはさんで、誰かと誰かを結ぶなんてことはできない。わかっているのは、男と女を何千人かずつ一緒に社会に入れておくと、その何割かがやがて戸籍係のところへ婚姻届を持ってくるとのことだけさ。分子と分子の場合も同じだよ。わかるのは最後の結果だけであって、戸籍係が年度内に百枚の婚姻届をそろえたいという野心を持ったところで、どうにもならない』(*2)と書いてある箇所が今回目に留まった。愛のおぼつかなさが上手にたとえられている。それを社会学的に再考察しているのが大澤真幸のこんな一節。『人間の共同体では——その中には多数の男／女がいるわけだが——チンパンジーの群れのような乱交は許容されておらず、男（女）は、特定の、そして単一の（ではないとしてもたいていは少数の）パートナーとのみ性的な関係をもつ強い指向性がある。(略) いわば、人間においては、性的関係は、複数の他者（パートナー）へと拡張しうる潜在的な可能性をベースにしながら、その上で、特定の——ときに単一の——他者との関係として収束しようとしているように見えるのだ。このねじれに、人間の性的関係の神秘がある』(*3)。愛の問題に絡めて、今度は性という観点が浮上してくる。性。なるほど。これもたしかに難問だ。オトコの下ネタは笑い話で、オンナの下ネタはドキュメントだといわれたりもするけど、性をめぐるとは性差が色濃く出る。そして性をめぐっては、それを積極的に扱う文学と、あまり直接的には取り扱わない哲学という差異もみえてくる。

哲学で愛を語るとこんな具合になる。『二人の人間が自分たちの存在の中心と中心で意思を通じあうとき、すなわちそれぞれが自分の存在の中心において自分自身を経験するとき、はじめて愛が生まれる。この「中心における経験」のなかにしか、人間の現実はない。人間の生はそこにしかなく、したがって愛の基盤もそこにしかない』(*4)。この考察はすばらしい。しかもかっこいい。でも観念のなかで理想的な愛ができあがってしまったら、かえって現実の恋愛なんかできなくなってしまうそうでもある。二次絵の完結性に純情を捧げるのではなく、俗人としては、できれば実生活の上で愛を実感しそのなかに安息を得たいとおもう。いつもなにかが過剰で、なにかが足りない——誰かによってでしか安定しないあやうい片足立ち。あるいは哲学ではこんな風に愛を指摘したりもする。『「ある人をその美しさゆえに愛する者は、その人を愛しているのであろうか。そうではない。なぜなら、天然痘は、その人を殺さずに、その美しさを殺してしまうことで、相手がもはやその人を愛さないようにしてしまうからである」。われわれは人を、美貌や知性など、その人の一部の「性質」に惹かれて愛するが、その性質はやがては失われるため、いつかはその人を愛さなくなる。だとすれば、われわれは相手そのものではなく、その「性質」を愛しているにすぎない。われわれの愛はつねに独善的な欲望(エロス)にすぎず、相手の善や幸福を願う慈愛(アガペー)たりえない』(*5)。この「独善的な欲望(エロス)」の中身を事細かくは掘り下げない。けれど、この独善的な欲望やエロスや性といった事柄にも、われわれ俗人が想定する愛の、決して少なくない部分が含まれているのもまた確かである。「慈愛(アガペー)」を探求していくルートはもちろんあるが、今回は分岐を

性の方向へ進んでみよう。

そこで今度は哲学ではない種類のテキストへも考察の視野をひろげてみることにする。独善的な欲望が決してわるいものではなく、というか是非を論ずる以前の生得的に備わっている性質だという点を補足しようとおもって本棚から川上未映子と斎藤環の対談を引っ張ってくる。精神科医の斎藤環が『(オトコには) 要するにペニスしかないんです。精神分析的には「ファルス」(ペニスの象徴) ですね。ペニスがあるかわりに体はない。(略) ペニスというのは非常に特異な器官なんです。自分の身体であると同時に、決して自分のものにはならないような、空虚で象徴的な器官なんです。自分にとっても一種の他者であって、これは操縦するだけのものではなくて、むしろ自分を操縦する別の主体みたいな位置づけになるわけです』(*6)ということ語っていて、「ああじぶんはオトコであるから余計に、輪をかけて、独善的な欲望に至ってしまうんだな」と都合のいい逃避をして淋しく嗤ってしまう。ペニスに操縦される、ペニスがじぶんではない別の主体として感じられる——こういう指摘を、男性はわりと実感的に受け入れられるのではないか。男性的な独善的なエロスについては、社会的な単位でも、個人的な単位でも、さまざまな問題が指摘されているのは先刻ご承知のとおりだろう。ここでは次の二つの別様の問題点をあげておくに留める。ひとつは『社会契約を締結する前に、女性の男性への従属を定める性契約が締結されたと考えなければ、近代国家の成立は説明できない』(*7)として性契約に光を当てて近代国家までを射程に入れた批判的考察。もうひとつはファルスに操縦されてしまった結果自らを傷つけてしまう男性固有の心理的問題を感じさせる指摘だ。『「産む性」であることを、おおっぴらに期待されている女性には、出産へ向けた身体教育は、それなりに行われている。自分の身体は自分の意思で決定できるという身体の権利教育に後ろ向きの保守層も、そうした出産教育には積極的だからだ。だが、男性には、「男であるからには女性を満足させなければならない」といった俗流の週刊誌的な情報ぐらいしかない。その結果、根拠の乏しい性情報に踊らされ、自らを傷つけてしまうというのだ。「男性にこそ、まともな性教育が必要なのに。オトコは能動的でありさえすれば片がつく、といわんばかりの社会の空気が男性を苦しめている」と、医師は疲れた顔でため息をついた。』(*8)。

愛について考えてみるといっても、アガペーとかいひだすとじぶんひとりの手には負えない。「ほんとうの愛とは何か？」という問いも些か漠然とし過ぎるようになってしまう。正面玄関を遠慮して、性というお勝手口から入って行けばればもうすこし愛のなんたるかに近づけるのではないかとおもったけれどなかなかどうしてむずかしい。斎藤環が『哲学はほとんど性の問題を扱えない。性の私秘性は、普遍を志向する哲学とは相容れないからです。いっぽう精神分析は、あらゆることを性(関係)的な文脈で考える』(*6)と指摘するような背景もあるかもしれないが、しかし哲学と精神分析を横断してみたことで愛を語る文脈が太く、生き生きとしてくるようにも感じられる。焦点がぼやけるという副作用はあるだろうが、「じぶんがより話したいのは愛のこんな点だ」を発見することには非常に有効だろう。

文学テキストは、ここまで見てきた愛と性の両方の視点を内包した表現形式として特に珍重される。たとえば漱石の「三四郎」では愛と性が主題になっていることは物語の最初に明示的に語られている。冒頭いきなり、福岡から上京して来た三四郎は、同乗した職員の妻となりゆきで名古屋の旅館でひとつ布団に一泊する。その女の器量を実はけっこう気に入っていたのだが、まだ女を知らない三四郎は大いに動揺したままで結局なにもせず、翌日、駅での別れ際に女から「あなたはよっぽど度胸のないかたですね」といわれてわりと傷つく。「三四郎」は、立身出世のための学問的上京(帝

大入学) と、愛と性という心を奪う関心事の出来がオーバーラップしながら、明治青年の成長物語になっている。漱石の作品を読んで非常に発奮した鷗外は、後に性欲にフォーカスを絞った性的自伝として「キタ・セクスアリス」を書き上げる。じぶんの想う愛が正真正銘本物の愛であるかどうかを考えたいなら「春琴抄」を媒介にしてみるのも一興だろう。「春琴抄」の当事者である春琴と佐助の間柄は、本人たち以外にはおよそ共感されないだろう。マゾヒズム的な要素もあり、(文字通り) 盲目的な服従もあり、跪拝主義のような点もあるのだから。それでも当人たちにとっては最高に居心地がいい、ふたりの感性や趣味嗜好にぴったりあう作中での関係性をつぶさに見ていくと、“普遍的な愛のカタチ” などという決まった型があるのではなく、試練を乗り越えた先に立ち現われる“ふたり専用に使えられた恋愛模様”こそが千差万別ながらも愛を感じさせるものとして残る気がするのだ。愛する相手への尽きせぬ敬愛と深い共感が備わっていると、「これこそ本物の愛かもしれない！」とおもわせるようなオーラが宿るのだろうか。このオーラの精妙なる不可思議さに魅せられて、ときに哲学だったり、精神分析だったり、また或るときには文学だったりといろんな部屋を行ったり来たりしながら、たくさんのひとと対話をかさねて、おぼつかない愛と性についての理解を深めていきたいとおもうのだ。けっこう真剣に。そして、できれば愛以外についても。

*1) : 【さろん哲学 議事録】 第 73 回 「愛するということはどういうことか？」

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2017/01/salon_giji_73.pdf

*2) : 池澤夏樹 (1988) 「スティル・ライフ」

*3) : 大澤真幸 (2017) 「ペアと乱交と」

*4) : 一生 (2016) 「愛することについて想う — 『愛の試み』 解題 2—」

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2016/12/81_Mail_News_20161217.pdf

*5) : 山上浩嗣 (2016) 「パスカル『パンセ』を楽しむ」

*6) : 川上未映子 (2012) 「六つの星星 川上未映子対話集」

*7) : キャロル・ベイトマン (2017) 「社会契約と性契約」 (中村敏子訳)

*8) : 竹信三恵子 (2016) 「「産ませる性」への重圧」

【ご案内】

「さろんラボ」ではみなさんのやる気とアイデアを募集しています♪

名称 : 【さろんラボ】

コーディネーター : 【大村】

「さろんラボ」、常設しています。

このさろんラボではみなさんの「やってみたい」を核に、「さろん」を触媒にして、どんな化学変化が起きるかを試みる場所です。さろんラボは当面継続して設けていきます。

この「さろんラボ」からは、さろんの参加者の手で、

【さろんラボ 001】 「あたまの中を散歩するてつがくカフェ」

<http://sanpo-tetsugaku.jimdo.com/> が生まれ、

【さろんラボ 002】 「哲学カフェ Ante-table/アンティテーブル」

<http://ante-table.wix.com/ante-table/> も生まれました。

既存の哲学カフェのカタチに限定せず、みなさんの中で温まっている関心ごとやご興味を添えて、どうぞお気軽に下記までご連絡下さい。みなさんとの新しい化学変化を、スタッフ一同心から楽しみにしています。

▽詳細はこちらまで

salontetsugaku@gmail.com (担当：大村)

【2】

コトバをハーバリウムする #18 (クスノキ)

本のコトバから

ポジティブどもにネガティブの何がわかる！
ネガティブはネガティブで現実をちゃんと見据えてるんだ！
こうやって落ち込んだ時にわざとネガティブになって心のバランスを保ってるんだぞ！
たまには後ろ向いたり暗い気持ちに浸ったりしないと心はパンクしてしまうんだ！

——阿部共実『空が灰色だから』

歌のコトバから

手放してみたいこの両手塞いだ知識
どんなに軽いと感じるだろうか
言葉の鎧も呪いも一切合財
脱いで剥いでもう一度
僕らが出会えたら

——Doughnuts Hole『おとなの掟』（作詞：椎名林檎）

【3】

さろんアーカイブの遊歩道 #12 (た)

カテゴリ：【さろん哲学 議事録】 第1回

テーマ： 「精神的な向上心を求めることは善か？」

開催日： 2010年9月11日

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2013/01/salon_giji_01.pdf

何かを考え始める入り口として、〇〇は善か？悪か？という問いを立てることがあります。さろん哲学でも、幾度かこのかたちの問いかけで、会を催してきました(※)。そして、いつものことだけど、同じ対象を真ん中に据えているのに、多様な善悪の判断や、感じ方が立ち現れてきます。善と悪は大別すると、社会で明文化されている善悪と、個人が感覚として持っている善悪の2種類があって、哲学カフェにおいては、後者の、主観世界の中で生まれ作られ現れてくる、個人の善悪をベースにして対話が進むことからだと思われまます。そこで、客観的には定義できない善か悪かの問いを一步深めて、「私は、なぜそれを善または悪と信じているのか？」という問いに変えてみる。するとそれは、ひっそりとしずかに待機している主観世界の住人である“私”との対話の道が開けてくる、そんな問いになるのかもしれない。

※)

第11回 2011年7月16日「恋愛における嫉妬とは悪か？」

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2013/01/salon_giji_11.pdf

第24回 2012年8月18日「募金は善か？」

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2013/01/salon_giji_24.pdf

第38回 2013年10月20日「生きることは善か？」

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2017/02/salon_giji_38.pdf

第41回 2014年1月13日「知ることは必ず善か？」

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2017/02/salon_giji_41.pdf

第43回 2014年3月15日「嘘をつくことは悪か？」

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2017/02/salon_giji_43.pdf

編集後記

メールニュース第89号をお届けします。

こんにちはフクロウです。お花見楽しめましたか？

都内のソメイヨシノはもう終盤ですが、八重桜は今からが見ごろですね。

本日の例会会場がある中目黒は、目黒川沿いに桜のなごりをまだ十分楽しめますから、会場までの往復にぜひ花見散歩をお楽しみください。

梟のラベルがキュートな「常陸野ネストビール」を片手にするとなお完璧ですね！

先日イベントのときに参加者の方から「いつもお忙しいそうですね」といわれ、「ぜんぜんそんなことないですよ。暇があるから春の惰眠がたいへん快適です」なんて話しをしました。

それで、忙しそうってことは余裕がなさそうにみえているってことかもしれない、とおもいました。

できれば「このひと余裕ありそうだな」とみてもらえるとうれしい。

ではどうしたらよいか。ちょっとかんがえてみました。

「暇です！」と妙なアピールをするくらいなら、じぶんからひとを誘ってみたらどうか。あちらこちらに出かけて目撃情報がふえる、っていうのもアリかもしれない。そんなわけで、春の陽気に誘われているんなところに顔を出してみたいとおもいます。さろんのフクロウは、たそがれだけでなく、朝や昼下がりにも飛びまわてみようかなど。都内に限らず、ときには杜の都まで。

そんなわけで、水無月六月、青葉繁れる仙台へフクロウ御一行様で旅にでます。
(余裕のある) みなさも奮ってご参加くださいませ☆彡
『青葉城恋唄』をBGMに、ネストビールを飲みながら往路の車中からたのしみましょう。
(本企画には「てつがくカフェ@せんだい」の方々からご協力を頂いています)

それではまた次号でお会いしましょう。ほう。
編集: (フクロウ)

さろん | Mail News 2017/4/15
⇒次号 (5月1日発行予定)

さろん Mail News 第89号 / 2017年4月15日発行【読み物号】
編集・発行: さろん
salontetsugaku@gmail.com
<http://salon-public.com/>
<https://twitter.com/salontetsugaku/>
<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

-
- ◇ 「さろん」にお知らせいただいたお名前・メールアドレスなどの個人情報は、当会からのご案内のためだけに使用いたします。
また、ご本人の同意なく第三者への提供はいたしません。
 - ◇ 「Mail News」の無断転載はご遠慮ください。転載ご希望の場合はご連絡願います。
バックナンバーはHPからご覧いただけます。
 - ◇ 【Twitter】 <https://twitter.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【Facebook】 <https://www.facebook.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【ホームページ】 <http://salon-public.com/>
 - 「さろん哲学」Web サイト <http://salon-public.com/tetsugaku/>
 - 「朝さろん」 Web サイト <http://salon-public.com/asa/>
 - 「さろん工房」Web サイト <http://salon-public.com/koubou/>



"copyright (c) 2011-2017 さろん. All rights reserved."
